

フルブライト語学アシスタントプログラム (FLTA)

2010 年度 参加者レポート

廣澤 美帆 ---Carleton College

中間レポート

私が派遣されているカールトン大学はミネソタ州にある小さな大学です。しかし、生徒はビックリするくらいよく勉強します。日本語を含め語学のクラスは毎日あるので大変そうですが、その分上達はすごく早いです。私の仕事はいろいろありますが、主に日本語のアクティビティ（日本の映画の時間、日本のお茶の時間、ランチテーブル、ラジオのDJ）です。その他にクラスでドリルを教えたりもします。キャンパスの中に寮、食堂などほとんどの施設があるのでキャンパス内でよく生徒に会いますが、日が経つにつれ日本語で話しかけてくれるようになりました。そうした姿を見ているととても嬉しくなります。

日本語のアクティビティではよく日本の料理も作ります。今まで餃子、カレー、ひな祭りのちらし寿司などを作りました。みんな日本の料理が好きなのでこのような活動はとても人気があります。私は生徒の日本語での会話練習も担当しています。授業の終わった後に少人数で20分ほど行います。だいたい1学期に3回ほど行います。クラスではあんまり話さない子も会話練習のときはがんばって日本語で話す努力をしてくれます。私が今までにとった授業はアメリカの移民についてのクラス、異文化理解のクラスです。どちらのクラスも難しいところはありましたが、大変興味深いクラスでした。特に異文化理解のクラスは留学生か留学経験がある人のみなので自分たちにしかわからない事情を話さうことでとても充実したクラスになりました。私が1番苦労したのは課題として出される論文ですが、先生方が細かく指導して下さるのでなんとかこなすことができました。

私の住んでいる町はとても小さいので休みの日でもキャンパスにいることが多いです。しかし、ミネアポリスまで行くとアメリカで1番大きいモール、モールオブアメリカがあり、ダウンタウンにはミシシッピ川や美術館もあります。普段は自分の勉強と日本語の授業が忙しいので行けませんが、長い休みには気晴らしにこういったところに行くのも楽しみです。

冬休みにはワシントン DC に FLTA 全員が集まり、カンファレンスが行われました。語学を教える上での様々なレクチャーや FLTA 自身によるそれまでの活動報告などが行われました。8月にアリゾナであった事前研修で出会った FLTA たちにも



会え、レクチャーの合間には彼らと交流を深めることができました。国務省ではヒラリークリントンさんがスピーチをしてくれて、みんな驚きましたがとても良いスピーチでした。また、日本の FLTA でソーラン節を踊ったことはとてもいい思い出になりました。

残り2ヶ月ちょっとですが最後まで日本語アシスタントとして自分の仕事を全力でこなし、自分のとる授業もがんばりたいと思います。

最後になりますが、私がこのレポートを書いている間に日本では東北関東大震災がありました。私の家は茨城県にあり、津波の影響はありませんでしたが地震により私の家も町も被害を受けました。私は海外に長期滞在するのが初めてなので家族と離れてこんなに不安になったのも初めてでした。私が1人で落ち込んでいると生徒が声をかけてくれたり、他の言語のアシスタントが私のことを気遣ってくれたりしました。世界中の人が日本を心配してくれているのを直に感じました。こちらでは多くの人が募金活動をしてれています。1日も早く被災地が復興するようにここから祈りたいと思います。そして日本に帰ってからその手伝いをできるように今は自分のことをしたいと思います。

最終レポート

約10ヶ月間のアメリカ生活を終えて先日帰国しました。思い返してみると、この10ヶ月間は長かったような短かったよう

な気がします。私はミネソタ州のカールトン大学というところに派遣されました。とても小さな大学ですが、生徒はよく勉強するし、先生方はとても熱心で有名な大学です。中間レポート以降、ラストスパートということで FLTA としても学生としても忙しい日々を過ごしました。最後の学期である春学期、私は平和学のクラスをとりました。平和学は私がずっと学んでみたいと思っていた学問だったのでカールトン大学で受講することができて良かったです。先生がイラン人だったので、アメリカ人からではない見方で学ぶことができてとても勉強になりました。私が今まで当たり前だと思っていた常識は日本での常識であって、世界の常識ではないのだということを知り、平和を築くためには自分の価値観で物事を見るのではなく、その国の文化を学び、理解することが重要だと感じました。この10ヶ月はそういった意味で良い経験をしました。いろいろな国の人びとと出会い、時には文化の違いから大変なこともありましたが、私が感じたことを今後様々な形で活かしていきたいと思います。

TA としては冬学期以降行っていた初級クラスの各レッスンに1回のドリルを春学期も担当させていただきました。20分ほどですが、自分でどんなドリルをするのか考えたり、教材を作ったり、とてもいい経験になりました。生徒が楽しんで練習できるものがないと思ひ、歌や絵を使ったものを多く活用しました。学期の最後のほうには生徒から私が授業で教える時が好きだと言ってもらえて本当に嬉しかったです。私は主に初級のクラスを担当していましたが、中級、上級クラスの会話練習もやらせていただきました。日本での留学経験者がいるアドバンスのクラスの会話練習はレベルも様々なので教材選びには特に苦労しました。日本の新聞の記事を使ったり、私が以前働いていたツアーコンダクターの資料を使ったりして学生の日本語がのびるように工夫しました。学生から面白かった、良い練習になったと言われるとやってよかったと思いました。

中間レポートでも書いたように東日本大震災以降、カールトン大学でも日本人の学生を中心に募金活動などが行われました。復興支援コンサートから始まり、次の1週間を Japan Week としておにぎりをカフェで売り、その収益金を日本赤十字に送りました。結果的に20万円以上集めることができました。カールトン大学は2000人にも及ばない小さな大学ですが、こんなに多くの募金を集めることができたのは生徒、教職員、近隣の方々のおかげで、特に日本語クラスの生徒はおにぎり作り、おにぎり販売の手伝いを快く手伝ってくれました。彼らにはこれからもどんな形であれ日本とのつながりを保ってほしいと思います。

このプログラムに参加して得た物は実は他にもあります。それ



は他の FLTA とのつながりです。特に日本の FLTA のみんなには様々な面で助けてもらいました。困ったことがあっても、すぐに連絡しあえる良い仲間ができてよかったです。これからもみんなとはつながっていききたいと思います。

最後になりましたが、このような経験ができたのも日米教育委員会のみなさま、フルブライト事務局のみなさまのおかげです。本当にありがとうございました。今回の経験を忘れずに日本とアメリカをつなぐ役割を担っていけるよう努力したいと思います。

フルブライト語学アシスタントプログラム (FLTA)

2010年度 参加者レポート

石井 恵美子 --- Wittenberg University

最終レポート

アメリカ留学は今回が2回目なのですが、TAとして日本語教育に携わったり、中国人とロシア人のルームメイトがいたりなど、初めてだらけのことでした。私が派遣されたWittenberg大学は全学生数が2000人と比較的小さな学校で、お互いの顔をすぐ覚えられ、クラス規模も10～20人と小さく、教授と学生間の距離がとても近いことが魅力的です。

TAとしては、日本人教授2人の下で、授業中に学生のサポートをしたり、Language Tableやその他たくさんのイベント、パーティを企画・運営し、たくさんの学生と交流深めることができました。日本を離れて、アメリカという地で客観的に「日本」を学ぶことができ、また情けない話ではありますが、今まで知らなかった「日本」をアメリカ人の学生から教えてもらうこともありました。改めて、自分の知識・教養不足を痛感しつつも、いつになっても学ぶことはたくさんあるんだと感じました。

ルームメイトの2人との生活は本当に充実していました。他人と暮らすという難しさも痛感しましたが、お互いを尊重し、とてもいい関係を作れたと思います。この留学でアメリカのことはもちろんのこと、ロシアや中国についてもたくさん学びました。改めて、世界って広いな、色んな人間がいるな、と感じさせる10ヶ月で、行って良かったと、心から思います。

フルブライト語学アシスタントプログラム (FLTA)

2010年度 参加者レポート

木村 大輔 --- University of Kentucky

中間レポート

私は2010年8月から、ケンタッキー州、レキシントンにあるケンタッキー大学にて日本語のティーチングアシスタント (TA) として働いています。渡米前はどんなところなのか全くイメージが湧かなかったケンタッキーですが、今では、現地の暖かい方々のお陰で第二の故郷の様に感じています。ここでは、そんなケンタッキーでの私の生活の一部をご紹介します。

私のTAとしての一番の仕事は、日本語のLab Session (LS) で学生が前週にクラスで習った内容を定着させる為に復習させることです。LSで私が特に気を遣っているのは、英語を使わないこと。学生にとってLSで扱う内容は既習事項であり、細かい文法などの説明は必要ないため、学生が少しでも日本語に接することができる様に、極力日本語のみで指導しています。また、楽しみながら復習できる様に、色々なタスクや日本の文化情報などを取り入れることも、気を付けていることのひとつです。LSは週に7回(各1時間)あり、学生は各学期6回以上参加する事を義務付けられているので、各LSは通常10人以下の少人数になります。そのため、一人一人の学生と近い距離で触れ合うことができ、学生からは「話しやすい」、「質問しやすい」、「楽しい」など嬉しいコメントをもらっています。また、私自身も学生からアメリカについて学ぶことが多いため、LSを教えるのは、いつも楽しみです。

LS以外の仕事には、"Japanese English Language Exchange Table (JELET)"と「タベの集い」という2つの月例イベントの企画運営があります。JELETでは、近隣にお住まいの日本人の方を大学にお招きし、学生と、日本語と英語で話して頂きます。レキシントンには日本人の方が多く住んでおり、その中には、英語を勉強したいと思っている方も多いため、学生にとっても日本人の方にとっても有益な会になっています。タベの集いは、ケンタッキー日米協会と共同で運営しています。会の目的は、日本人同士および日本人と現地学生の交流を深める事。毎回ケンタッキーにいらっしゃる日本人の方をゲストスピーカーとしてお招きし、1時間程度日本語でスピーチをしていただきます。能の先生、青年海外協力隊に参加経験がある方などに毎回とてもユニークな話を聞いており、現地学生はもちろんのこと、日本人にとっても学ぶ



事の多い会です。

上記以外にも、学生として2つ授業を履修しているのですが、毎日とても忙しいですが、辛いと思った事は一度もありません。それどころか、毎日楽しくて仕方ありません。このような素晴らしい機会を下さった日米教育委員会に感謝し、残りの日々も悔いの無いよう全力で業務にあたり、日米の相互理解に少しでも貢献できればと考えています。

最終レポート

ケンタッキー大学でのフルブライト語学アシスタント (FLTA) としての1年間は毎日学ぶ事の多い非常に充実したものでした。今回のレポートでは、私が担当した業務とそれらから私が学んだ事を紹介させていただきます(各業務の詳細は前回のレポートをご参照ください)。

私がFLTAとして最も時間を使ったのはLab Session (LS) でした。学生がいかに楽しく既習事項を定着させるかに気を遣い、毎週様々なアクティビティーや教材を用意しました。合計で80人程の学生を担当していたため、初めのうちは学生の名前を覚えられず、教え方もごちなかったのですが、学生との良好な関係が出来てきた頃から、学生も私も楽しめる授業を作れるようになっていきました。義務付けられていた出席回数は各学期6回であったにもかかわらず、何人も学生がそれ以上参加してくれ、嬉しかったことを覚えています。

そのおかげで、私のLSの準備と指導に対する意欲が高まりました。これらの経験から、特に言語の授業においては、学生と教師の関係性が双方にとって重要であることを再確認しました。

LS以外の担当業務であった Japanese English Language Table (JELET) と夕べの集いからも学ぶ事は多かったです。これらのイベントの企画運営には学外の方々とのやりとりが必須であったため、ある意味ではLS以上に責任の大きい仕事でした。イベントに参加して下さった日本人の方々からは、「いつも楽しみにしています」や「学生の役に立ちながら自分も勉強ができる有意義な会だと思います」など、励みになるコメントを多数頂きました。また、学生にとっても教師以外の日本人とカジュアルな場で話をする事は、本物の日本文化に触れたり、学習意欲を高めたりなど様々な意味でプラスになったのではないかと思います。責任が大きく大変ではありましたが、このようなやりがいのある仕事に携われたことは私にとって大いに意味のあることでした。

上記の他にも、現地のこども博物館でこどもの日についてのプレゼンテーションをしたり、学生に囲碁を教えたり、日本文化の普及に関する活動もいくつか行いました。プレゼンテーションの準備は日本とアメリカの文化的な違いについて考えるよい機会になりました。また、意外にも囲碁は人気が高く、初めは毎週週1回だった集まりが、いつのまにか週5回になり学生との距離を縮めることに一役買いました。

以上の通り、私は FLTA プログラムへの参加を通し、言語教育の実務経験だけでなく、文化交流など様々な事を学ばせて頂きました。日米教育委員会、ケンタッキー大学、その他の関係者の方々に深く感謝するとともに、さらに言語教育に関しより深く学び、国際親善に寄与したい所存です。

フルブライト語学アシスタントプログラム (FLTA)

2010年度 参加者レポート

木村 浩司 --- University of Scranton

中間レポート

2010年8月10日、日本を出国しました。これまでずいぶん長く英語に触れてきたつもりでしたが、実際に英語圏の国で生活するというは初めての経験でしたので、不安は感じていました。

最初の5日間は、University of Notre Dameでのオリエンテーションでした。オリエンテーションに参加するため、同じくJapanese FLTAの杉原さんとChicagoの空港に降り立って集合場所を探し始めたとき、携帯電話もなければ知り合いもない、どちらに進めばいいのかすらわからないと、ゼロからの出発であることが痛切に感じられました。

しかし、自分を絶対にこの一年で変えると固く決意し日本を出国しましたので、逆にこんな不安感はなかなか日本には経験できないことだと考え直し、積極的にそんな自分に対峙し克服することにしました。そしてどんどん周りの人に話しかけていきました。幸いにも誰も自分のことを知っている人はいませんから、好きなだけ失敗できます。この環境が今ではたまたま好きです。そうして無事他のFulbrighterと合流することができ、後に派遣先のUniversity of Scrantonで同僚となるアルゼンチン・フランス・中国のTAと出会いました。彼らは本当に優秀で、英語も私よりはるかに流暢に話せていました。自分より優れた同僚ばかりいることは非常にありがたいことです。なぜなら、その分彼らに追いつこう、認めてもらおうと夢中になって努力することを通じ、確実な成長につながるからです。

オリエンテーションには世界中からのFulbrighterが参加しており、尊敬できる素晴らしい方たちばかりでした。彼らはただ優秀なだけではなく、ユーモアもあり、人としての考え方もしっかりとしており、彼らと話し、共に学び、時に踊り、時間を共有することで、私のこれまでの考え方が変わっていくのを感じました。世界にはいろいろな人がいて、それぞれがその文化に根ざした価値観をもっており、それを知るという機会は本当に何にも代えがたいものであると思います。12月にWashington, D.C.でConferenceがありましたが、彼らに再びお会いし、オリエンテーションの大学が違った他のFulbrighterとも話すことができ、かつホテルはグランドハイエットホテルでしたので、間違いなくこれまでの人生で最高の



数日間でした。

Fulbrighterであることはアメリカにおいて特別な意味を持っています。新しくどなたかにお会いする際には、その方をご紹介くださった方は私がFulbrighterであることを必ず先方にお伝えします。相手の方もそれを聞いて敬意をもって接してくださいまし、Fulbrighterであることでずいぶん多くのPartyやPanel Discussion等にご招待いただきました。恐縮する経験の連続です。私の行動、発言その一つ一つが、その場にいる人々のFulbrighter、また日本に対する評価に影響しかねないので、発言等には常に気をつけています。先に述べましたWashington, D.C.でのConferenceでは、他のFulbrighterの方もおっしゃってるかもしれませんが、Hillary Clintonさんにスピーチをしていただくという光栄にあやかりました。アメリカの国務長官をなさっている世界的に有名かつ影響力のある方が、目の前で自分たちのためだけにわざわざSpeechをしていただけたということからも、いかにFulbrighterがアメリカにおいて重要な位置づけをされていることがわかっていただけるのではないかと思います。

私の派遣先のUniversity of Scrantonは2期制の大学であり、Fall SemesterとSpring Semesterで1 academic yearを構成しています。私は年間に5つまで授業を受講することができ、Fall Semesterには外国語教授法を学ぶSubject MethodsとCollege Writingの講義を、年明けの一月に集中講義の形で別のWritingの講義を、そして現在Spring Semesterでアメリカの政治を学ぶ講義とCompositionの講義を受講しています。どの授業も素晴らしい

く、宿題も当然多いですがその分得るものも多いですので比較的楽しんで勉強できています。ですが、それは学んでいる内容が非常にためになるという意味であって、英語自体の問題は常につきまといてきます。授業中に英語が聞き取れなかった箇所に関しては必ず毎回授業後に Office に伺い、課題や質問など理解するまで徹底してお聞きすることにしています。そうする中で自然と先生方ともよい関係が築けてきたのではないかと思います。

また、私の大学での仕事は、主なものをあげますとまず初級と中級2コースの日本語の授業を担当しています。本大学には私以外に日本語の先生がいませんので、シラバス作りから成績管理まで全て私が行なっています。授業は一回50分で、週に各3回ずつありますので、合計で週6回授業を行っています。アメリカの学生は、聞いてはいましたが本当によく勉強します。本学ではほとんどの学生が寮に住み、空いている時間はほぼ勉強しているようです。ですから授業も当然質の高いものが要求されますのでこちらも必死です。しっかり準備し授業をすると、生徒はストレートに感想を言ってくれ、嬉しい言葉をもらうと本当に嬉しくなりもっと頑張ろうという気になります。

メインの授業以外では、大学から求められた週2時間の Office Hour に私が自主的に行っている時間を合わせて、現在合計週5時間の Office Hour を行っています。そこでは生徒の質問に答えたり、日本語の会話練習をしたりしています。生徒数は各クラスそれぞれ10人以下の少人数ですので、一人一人の生徒とじっくり向き合いフォローすることができ、その点でも非常に楽しく仕事をさせていただいています。

その他ボランティア活動など細かい仕事をいれますと様々ありますが、主なものは上記の二つです。それに加えて自分の受講している講義の予習復習がありますので、正直言いますとほとんど自由な時間はありません。毎日朝8時ぐらいから仕事を始め、夜中の1時2時に University Police のパトカーで送迎していただいて帰宅するという日々です。大学には大学の安全管理を担当する実際の警察官の方が24時間体制で数十人いらっしゃり、夜遅くに帰宅する際にはパトカーで送っていただけます。私はアメリカで初めてパトカーというものに乗りましたが、後部座席にはクッションがなく、全体が固いプラスチックのような感じで、右折左折時には反対側に滑って行って面白いです。

私がアメリカ留学を決めました大きな理由の一つは、その文化を体験することにあります。日本にいて英語という言語自体を勉強するということはもちろん十分に可能なのですが、その国の文化という点に関しましては、やはり実際にそこに住んで人々の中に入って行くことで初めて理解可能なのではない

かと考えていたからです。アメリカ滞在を通じ、個人的にはこの思いをより強く感じています。

アメリカ人の方々に對し、私が現在いただくようになっている印象は以下のようなものです。まず、助けの手を出すことを本当に自然にされます。例えば、ご老人の方が重そうな荷物を持っていると、例え見ず知らずの方でもごく自然に声をかけ持ってあげます。ドアを開けるときでも、必ず後ろに人がいるかどうか確認し、人がいるとその方が通るまでドアを開けてあげます。また、私は日本において、アメリカ人の方は思ったことをダイレクトに言ったり、日本語のように遠回しな表現を使わないと聞いていましたが、少なくとも私の知る限り一概にはそう言えないように思います。英語には日本語の敬語に相当する言葉がないだけで、丁寧な表現は山のようにあります。日々の会話の中で彼らはよく丁寧な表現を使っていますし、またそう気をつけてもいます。また、遠回しな表現や、日本語のように明らかなことは省略して話すというようなことも日常的に行っています。このようなことはやはりアメリカに住んで初めて分かることなのだと思います。ただし、アメリカでは年齢の差はほぼ意味を持たないので、親子ほど歳の離れた人同士が普通に First Name で呼び合っていたり、相手を傷つける発言でないと判断した場合は思ったことを率直に言うというようなことはあります。私にとりましては毎日が本当に驚きと発見の連続で、このような機会を与えていただいたことに心から感謝しています。

留学生活もあと残すところ2か月ほどになりましたが、後悔することのないよう毎日を大切にしていきたいと思います。また、この場をお借りしまして、私の留学実現にお力を貸してくださいました全ての方々に礼申し上げます。ありがとうございます。

最終レポート

2011年6月1日、FLTAプログラムを終えて成田空港に着いたとき、とても不思議な感覚を覚えました。日本語のアナウンス、日本語表示、周りにいるたくさんの日本人の方々。アメリカに行く前は当たり前であった全てのことがとても奇妙に映りました。

そして今、帰国後1カ月が過ぎ、そのような感覚がなくなっている自分に気付いています。帰国当初は空港からの電車の中でさえ、誰とも話さず静かに携帯電話を使っている人々に違和感を感じていたのですが、今では自分自身そうしているのです。つまり、もう日本に順応していたのです。

FLTAプログラムによりアメリカに滞在し、勉強し、アメリカ

に限らず世界中の方々と交流を持たせていただいたことで、私の価値観や人生観は大きく変わりました。幸せであるとはどういうことであるのか、何のために働くのか、なぜそう考えるのか等々、アメリカで出会った方々から非常に大きな影響を受けました。

今後 FLTA プログラムに参加を考えていらっしゃる方々にはぜひ応募されるようお勧めしたいと思います。人によっては本プログラムに参加することにより生じる生活上のリスクを感じている方もいらっしゃるかもしれませんが、FLTA プログラムはそのようなあらゆるリスクを超越した素晴らしい人生経験を必ず与えてくれます。

本プログラムに応募するには英語の教員免許取得が条件となります。よって、必然的に将来英語の教員になろうと考えていらっしゃる方が多いと思います。そのような方はぜひ本プログラムに参加してみてください。将来英語を教える際、本プログラムから得た経験は必ずプラスに働くはずですよ。

私自身、今回の渡米を通し、数字で測ることのできる英語力はもちろんですが、数字で測ることのできない英語力を非常に身につけることができたと感じています。そして、その数字で測れない英語力、例えば文化的側面に対する理解といったものが、実際に全てのリスクを引き受けて渡米することによってのみ得ることのできる非常に大きな財産であると思っています。将来英語を教える際にも、そのような英語力を持った先生と言うのは生徒にとって非常に魅力的に映るのではないのでしょうか。

さらに、Fulbright によるプログラムが真に素晴らしい点は、アメリカのみならず世界中の学業面でも人格的にも優秀な方々と交われる点にもあります。彼らと時間を過ごし、腹を割ってお互いやお互いの国・文化について語り合うことで、世界の生の文化に触れる経験ができるのです。私は全 FLTA が集まるワシントン DC での Conference において、インドからの FLTA の方と同じ部屋でした。宿泊者名簿を見たときに、彼は Last Name を持たず、First Name だけでした。お会いした時にそのことを尋ねると、彼は自分はカースト制度上のある理由から Last Name を持たないことに決めたと教えてくれました。カースト制度については受験勉強を通して知っていましたが、彼との会話を通し、より深くインド社会について理解できたように思いますし、漠然とはありますが本来の勉強とはこういうことをさすのではないかと感じました。

そして、彼と理解を深めること一つをとってみても、英語を話すことができるようになったことで初めて可能になったことであり、英語という言葉が与えてくれる素晴らしい可能性に気付

いたのもこの時でした。

まだまだ英語やアメリカについて知らないことはたくさんありますが、それはそれでいいのではないかと考えています。今後一生をかけて少しずつ楽しみながら知識や理解を深めていきたいと考えています。私の Report がこれから FLTA プログラムに参加を考えておられる方々に少しでもその魅力をお伝えできましたなら本当に嬉しく思います。私の人生を変えてくださった Fulbright プログラム、また私の渡米生活を支えてくださった日米教育委員会の方々、これまでお世話になった全ての方々に感謝しています。本当にありがとうございました。

フルブライト語学アシスタントプログラム (FLTA)

2010年度 参加者レポート

長沼 由香里 --- Lincoln University

中間レポート

現在、私はペンシルベニア州にあるリンカーン大学 (Lincoln University) というところで働いています。リンカーン大学は黒人学生のために設立されたという歴史があり、現在でも学生のほとんどは黒人学生です。白人学生・ラテン系の学生は数えるほど、アジア人の学生はいないという特殊な環境です。学生数 2000 人程度の小さい大学です。

今回のレポートでは、私の秋学期の生活を三つの側面からご紹介させていただきます。一つ目は学生、二つ目は日本語教師、三つ目は私個人としての生活です。

秋学期は学生として、African American Experience と History of Black People in the US という授業を受講しました。この二科目はリンカーンならではの科目であり、他の大学では学べないことが学べる貴重な機会になると思ったからです。実際に、授業に出席し、この大学で過ごし、街へ出て人々の様子を見るうちに、アメリカそのものについて考えるようになりました。はじめは授業についていくので精一杯でしたが、次第に慣れ、授業内容だけでなく、英語そのものの勉強にもなりました。授業をもちながら、他の学生と同じように小テストを受けたり、レポートを書いたりするのは決して楽ではありませんでしたが、結果的には良い経験をさせていただいたと思っています。

日本語教師として、秋学期は二クラス (JPN102 と JPN202) を担当させていただきました。日本語を教える教員は私一人だけなので、責任重大です。JPN101 は日本語を初めて学ぶ学習者を対象としているコースで、JPN202 は一年間、日本語を学習した経験がある学生のためのコースです。特に 101 のコースでは、彼らにとって初めての日本語の授業ということで、プレッシャーを感じながら授業をしていました。試行錯誤を重ね、授業準備に何時間もかかることもありましたが、学生がひらがなやカタカナが読めるようになって喜んでいたり、自己紹介ができるようになっていくのを見て、代えがたい喜びでした。また、学期の終わりごろになると、学生同士で教えあっている様子も見られ、学生に大いに助けられました。授業外の活動としては、週一回日本

語クラブがあり、秋学期は、習字、映画鑑賞、折り紙などを学生と一緒に行いました。秋学期の中ごろには、外国語学部のイベントとして各 TA が自国の料理をふるまう催しがありました。私はお好み焼き、みそ汁、太巻き寿司、白玉団子を作りました。好評でよかったです。

日常生活では、同期の TA のおかげで、ほぼ毎日笑って過ごすことができました。リンカーン大学には、私と同じ立場の TA が他に 4 人います。スペイン語の TA が二人 (スペインおよびペルー出身)、フランス語の TA (フランス出身)、そしてアラビア語の TA (チュニジア出身) です。一つ屋根の下で生活を共にし、職場でも一緒に働いています。夏はお互いのことをよく知らず、ちょっとした衝突が起こることもありました。次第に仲良くなり、今ではどこへ出かけるのにも 5 人一緒です。考えてみたら、今後自分の人生でこんな生活をするのではないだろうと思います。家では、お互いの国の料理を作りあったり、お互いの言語のあいさつを教えあったりなどしています。これまでカレー、お好み焼き、やきそば、納豆巻き、肉じゃがなど簡単なものを作りました。日本食は人気です (納豆は難しかったようですが) ! 同期がいてくれるおかげで、ささいなことでも楽しくなりますし、何かあった時にも相談することができます。これまで自分が知らなかったことを同期から学ぶことも多いです。相手の意見を尊重しつつ、自分の意見もきちんと述べるというのは日本人は割と苦手だと思のですが、私自身、自分の意見を (しかも英語で) 述べる練習をだいぶさせてもらったと思います。また、リンカーンでは地域の方がホストファミリーになってくださっているので、ありがたいです。買い物や食事と一緒に出かけただけでなく、色々なところへ連れて行っていただきました。

このように、リンカーン大学では、さまざまな立場から色々なことを吸収することができます。この大学を去ることを考えると寂しくなりますが、残りの期間で自分に何ができるか、お世話になった人に恩返しをするつもりで春学期を過ごしていこうと思います。

最終レポート

リンカーン大学から帰国してしばらく経った今、この一年弱の経験を振り返ってみます。出発する前は、色々なことに対して不安がありました。自分の英語もどこまで通用するか分からないし、一緒に住むことになる他のTAとはうまくやっていけるだろうか?など、その時点では考えても仕方がないようなことで思い悩んだりしました。実際に、最初の二、三カ月は英語での生活、TAの仕事、そして共同生活に慣れるまで大変でした。しかし、帰国した今、不安はあったけれどもFLTAプログラムに参加できて本当に良かったと思っています。かけがえのない貴重な経験をすることができました。FLTAに限らず、留学してみたいという気持ちがあるけれども、迷いもある方がいたら、ぜひ行ってみることを強くおすすめします。苦しいことや大変なこともあるかと思いますが、それも含めてあらゆることから学べると思います。

8月末から始まった授業では、学生の反応を見ながら、授業の進め方や教材を変えるなど、試行錯誤しながらの毎日でした。日本語教師としてクラスを持つのは初めてだったので、至らない点多々ありました。それでも学生は毎日の宿題にがんばって取り組んでくれ、秋学期の終わりには日本語で簡単な自己紹介ができるまでになりました。春学期では、身の回りのことについて簡単に言えるようになることを目標としました。形容詞と名詞を組み合わせる自分の持ち物について説明できるようになったり、自分の日常生活についての簡単な質問に答えられるようになりました。授業内では、特に「～(交通手段)で・・・(場所)に行きます」を使って、日本国内を旅行する計画を立てた時の学生の楽しそうな様子が印象的です。学生の中には、本当に日本に留学・旅行したいと思っている学生もいましたが、そうでない学生ももちろんいました。それでも、ほとんど全員が(普段の授業よりも)真剣になって旅行の計画を立てているのを見ながら、日本の話ができたのが本当に楽しかったです。その頃は学生との信頼関係もできていたので、学生も興味をもって色々なことを聞いてくれました。いつか本当に学生と日本で会える日がきたらいいなと思います。

共同生活の方でも、秋学期を終え、ワシントンでのフルブライトカンファレンスを終えた頃には、他のTA達ともすっかり仲良くなりました。12月に行われたカンファレンスでは、2010年度のFLTA全員が一堂に会します。普段は会うことのない日本人TAの同期と一緒にソーラン節を披露したり、新しい知り合いができたりなど、ここでも充実した経験ができました。加えて、クリントン国務長官がお越しになり、FLTAのためだけにスピーチもしてくださいました。会場で他のTAと話をするうちに、リンカーンのTA同士のつながりの強さも実感しま

した。私たちはお互いが一緒ですごく恵まれていると思っていましたし、笑いの絶えない毎日を送っていました。リンカーンの同居していたTAからは多くを学びました。ここには書きつくせませんが、彼らと話をしていると、自分がいかに島国の人間かということをやでも感じさせられます。自分の世界の小ささをつきつけられたようでした。彼らは、自分の国にとどまらない、世界的な視野を持って活動していました。フランス、スペイン、ペルー、チュニジアという国を、今では友達のいるところ、として見るようになりました。いつか彼らを訪ねて行きたいと思っています。

最後になりましたが、今回の貴重な留学の機会を与えてくださった日米教育委員会とIIEのスタッフのみなさまに、心よりお礼を申し上げます。日米教育委員会のみなさまは、日本から常に温かいサポートをしてくださり大変感謝しております。本当にありがとうございました。

フルブライト語学アシスタントプログラム (FLTA)

2010年度 参加者レポート

西野 恭平 --- Ramapo College of New Jersey

中間レポート

ラマポ大学はニュージャージー州の北部にある小さな州立大学で、ニューヨーク市からバスで1時間15分ぐらいの所にあります。大学のまわりには山があり、秋は紅葉がきれいで、ハイキングを楽しみました。道路を歩けば、馬や鹿がいます。結構田舎です。

秋学期、担当した授業は日本語初級(週2回)でした。今までシラバスをもらう側でしたが、次からシラバスを作る側になる。不安と期待が交錯する中、日本語 FLTA 生活がスタートしました。クラスのメンバーは14人。初めてクラスに行ったときのクラスの反応が今でも忘れられません。クラスのドアを開けて、14人の前に立ったとき、辺りがシーンとして、先生若すぎるぞという目でみられました。僕は教えるのが初めてで、学生は日本語を学ぶのが初めてです。学生も僕も一生懸命でした。中間テストが終わった頃、学生の中に差が生まれてきたので、どこに焦点を当てて授業を進めればよいのかわからず、苦労しました。いわゆるオタク系の学生もいますが、コムデギャルソンのような日本のファッションやポップアートに興味のある学生や、日本の歴史や文学、ドラマなどに関心がある学生、さらにビジネス専攻だから日本語を履修してるなど、意外と学生の興味関心はさまざまでした。

授業外で楽しかったことは、料理をつくることでした。日本語クラスみんなで夏野菜カレーを作りましたが、「にん人」は切れません!と言って大騒ぎしたり、カレー粉をチョコレートだと思っていたり、騒いで手がぜんぜん動いてない人たちがばかりで、カレーを作るだけで何時間もかかりました。その他にも、食を通して、ルームメイトたちからさまざまなことを学びました。チュニジア出身のラムジーから、イスラム教のハラールフードについて学びました。イスラム教では、血を飲むことが禁止されています。たとえ牛肉や鶏肉であっても、適切に処理されていなければ食べることができません。また夏のオリエンテーションの時、ラマダンの時期で、ラマダンについて教えてもらいました。クスクスを一緒に作りました。食を通して、イスラム教の文化について触れることができました。さらに、上海師範大学の先生と餃子(日本の餃子とは少し違う)を作ったり、ロシアのセントピーターズバーグ大学の先生からヴォッカの飲み方を習ったり、ボッシュというロシアの伝統的なスー



プを飲んだり、イタリア人のジュゼペとニョッキを作ったりしました。もちろん、僕は寿司を作りました。一番おいしかったのはラマポで唯一のイタリア人学生、ジュリアーノが作ってくれた Penne alla Vodka です。ジュゼペはいつもパスタを料理しているので、日本でいうラーメンだと思いました。驚いたことは、パスタといっても種類が豊富なことです。料理をみんなで作ることがすごく楽しかったので、ワシントン DC では "Food from All over the World" というタイトルで、ファーストセメスターの体験を発表しました。最後に、他国の FLTA に好きな自国の料理を書いてもらい、ミシュランガイドのようなガイドブックを作ると宣言しました(まだ作ってませんが)。

文化的な活動として、インターナショナルフェスティバルでは、日本の中世の美意識について発表しました。またフェスティバルで、日本語の学生と焼きそばを作ったり、エキストラクレジットと称し、日本語クラスの学生を集めて阿波踊りも披露しました。その後、初音ミクの音楽に合わせて、ダンスをする案が学生から出たので、モダンなダンスも取り入れ、会場を沸かせることができました。踊りをみた学長さんが、もう一年 FLTA としていてほしいとおっしゃっていました。

週末は他国の FLTA と一緒に NY に出かけ、ジュゼペとスティーグリッツの写真展に行ったり、奈良さんの作品を見たり、中学生の頃からずっと行きたかったストロベリーフィールズとダコタアパートに行ったり、充実した休日を過ごしています。またアジアソサエティで柴田元彦先生とポールオースターの翻訳についての対談を聞きに行き、翻訳は歳をとるけど、原著はいつまでも歳をとらないという、翻訳の賞味期限の話が妙に心に響きました。また秋学期の始めに、プリンストンクラブニューヨークという所でレセプションがあり、フルブライター

の方々に会う機会がありました。ミネソタのFLTAの友人たちは、公共交通機関では会場に行くことができず、レセプションに参加できなかったと言っていたので、ニュージャージーはそういう問題もなくラッキーだと思いました。

ワシントンDCでの会議の後、日本、モロッコ、フランスのFLTAが遊びにきました。みんなでNYに行ったり、ニュージャージーの凍った池で遊んだり、モロッコのお茶に挑戦したり、フランス人のファッションセンスについて教えてもらったり、本当に他国の人々との交流を通して、いろんな国の文化に触れることができました。ニュージャージー出身の学生が多いラマポ大学の中で、世界中の人たちと友達になることができたのもFLTAプログラムの特色だと思います。このような機会を与えてくださったフルブライトプログラムおよび日米教育委員会の皆さんにはとても感謝しています。そして、いつかさまざまな国の人たちと一緒に勉強をしたいと強く思うようになりました。

最終レポート

FLTAとして、さまざまな人々との出会いを通じて、『グレート・ギャツビー』のニック・キャラウェイのように、自分を大きく成長させることができました。帰国した今、僕をつき動かしているのは、アメリカで培ったさまざまな経験を日本の学校で子どもたちに伝える強い使命感です。そして、もうひとつは、未来のFLTAの方々にも、体験したことのない世界の深遠に、勇気を持って飛び込めと鼓舞する強い使命感です。FLTAとして過ごした10ヶ月は、まるで国連の中で生活しているかのような毎日でした。それは前回のレポートで紹介したような、単に食習慣を通じて学ぶ文化だけではありません。アメリカでは、同僚のFLTAやルームメイトとの会話の中で、世界を肌で触れる瞬間が幾度となくありました。日本と近隣諸国との間で領土問題が勃発したときには、中国とロシアの先生方と率直に話し合いました。また、チュニジアでのジャスミン革命のときには、チュニジア人のルームメイトが、革命の背景を教えてくださいました。たくさんの難民が北アフリカからイタリアのランペドゥーザ島に押し寄せていて、イタリアでは大問題になっていること、彼らの最終目的地はフランスであること、そしてアフリカを植民地にしてきたフランスにも責任があること。さらに、イタリア人のルームメイトもリソースパーソンとなり、北アフリカでの民主化運動について話し合いました。また、リビア情勢に関しては、Office of the Special Adviser on Africaのディレクターの方からIIEで話を伺う機会もありました。そのとき、フランス人で国際関係を専攻しているフルブライターが、今後のEU諸国で起こるであろう反移民感情について質問をしていたことが印象的でした。また、エジプトで革命が起きたときのことで、エジプトのFLTA



は、カイロに住んでいる家族や友人たちはみな広場でデモに参加しているにもかかわらず、自分はデモに参加できずにFLTAとしてアメリカにいる。やりきれない思いがあると僕に吐露してくれました。そして、帰国したら、フェミニズムの政党に入りたいと語る彼女がとても輝いてみえました。また、クウェートのFLTAは、これらの運動に危機感を募らせた母国の国王が、全国民に対し1人あたり何十万円もばらまいたと教えてくれました。日本に住んでいると、バラエティーとか日本の政治と関連した番組ばかりで、世界で起っていることについて考える機会が僕にはありませんでしたし、語り合う友人もいませんでした。このように、世界の人たちと語り合い、仲間として強い絆で結ばれることは、FLTAの特権であり、そしてまた、フルブライターであることを互いに強く自覚し合う、僕の人生の転機でした。

そんな中、東日本大震災が起こりました。ラマポ大学では、日本語のクラスとUnited Asian Associationsというアジア系の学生のサークルの有志が集い、校内で"Crane for Hope"と題し、募金者に折り鶴を贈る募金活動をしました。たくさんの方々のおかげで、一週間で1000ドル以上の募金が集まりました。多忙な授業の合間をぬって、学生たちが募金活動に協力してくれたことに心から感謝しています。また、日本人のFLTAの仲間も全米各地の大学で募金活動をしていると聞いたことも、僕たちの募金活動の励みとしました。

世界情勢を語り合ったり、震災の募金活動、それにニューオーリンズでのボランティア活動などを経験し、まずは「共感すること」。そして、それらがきっかけとなり、問題を解決するためのあらゆる行動が起こせること。そして、行動が起こせると、自分の成長が始まるのだと僕ははっきりと感じました。

FLTAプログラムを通じて培った世界観や人々との絆、そして郷土を愛する心、社会的な責任感や使命感で、僕は子どもたちの将来の可能性を1つでも2つでも伸ばしてあげたいのです。このようなチャンスを与えてくださったフルブライトジャパンの事務局の方々、IIEスタッフ、ラマポ大学、そしてアメリカ合衆国に感謝しています。本当にありがとうございました。

フルブライト語学アシスタントプログラム (FLTA)

2010年度 参加者レポート

関 千晶 --- Ursinus College

中間レポート

フィラデルフィアから電車とバスを乗り継いで1時間半ほど、閑静な郊外の町 Collegeville に私の働く Ursinus College があります。アメリカ人でもどう発音するのかわからないというこの大学名は、アーサイナスと読みます。あの Catcher in the Rye を書いた J. D. Salinger もわずかな間ながら在籍していたという、1869年創立の学生数1500人ちょっとの小さな私立のリベラルアーツカレッジです。

ここでは私は、Assistant という立場で、2人の Supervisor の先生の指導の下、1年生から4年生まで合わせて50数名の学生を教えています。週5日ある授業のうち、各クラス週に1回が私の担当するドリルセッションです。私のクラスでは新たな文法を教えるわけではなく、それまでに Supervisor の先生から習ったことをもとに、何度も口頭練習を繰り返したり、ペアワークを行ったりします。ごちない発音ながらも日本語、そして日本文化に興味を持ち一生懸命勉強する姿は教えるこちらにとって、とても大きなモチベーションです。4年生になると日本の伝統文化やポップカルチャーについて独自に調べ、パワーポイントを使ってプレゼンテーションも行います。アメリカの学生から見た日本を知ることができてとても興味深いです。

授業外でも、週に1度の日本語テーブルや、ジャパンプラブへの参加など、TAとしての仕事はいろいろあります。授業の外で学生に会うと、また彼らの違った側面が見られてとても面白いです。まだまだ英語がつかない私は、ほかのところで何か日本をアピールできないかと、日本語テーブルに四季折々の折り紙を持って行って飾ったり、日本人留学生にも頻繁に来てもらったりなどの工夫をしています。ジャパンプラブでは一緒に折り紙や書道をしたり、Tour of Asia というアジアフェスティバルに向けてダンスや装飾を企画したり・・・学生たちがどれだけ日本文化に対して興味を持っているのかを知り、そんな彼らに日本語・日本語文化を教える立場である自分の責任感をひしひしと感じます。

もちろんこちらでは学生として授業も受けていて、私は主に教育学の授業を中心に履修しています。春学期の教育学の授業は高校での授業観察10時間が必須で、時間を確保する



のは大変ですが、日本の授業とは一味も二味も違う、こちらの中等教育の様子も知ることができてとても勉強になります。直接文化の授業はとっていないのですが、教育を通してアメリカの文化を知ることができるという点で、とても面白い経験ができています。

昨年の今頃、ちょうど派遣先の通知が来たころは、異国で1年暮らすことに対する期待もありましたが、それ以上にちゃんとやっていけるか不安で不安で仕方なかったのを思い出します。しかし今となっては、これだけこちらの生活を楽しくしている自分に驚きすら感じます。それは一緒に支えあって頑張れるTA仲間がいるというのが大きいです。今日本語担当の私のほかに、Ursinusにはフランス語、ドイツ語、スペイン語、中国語、アラビア語のTAも派遣されています。それぞれがお互い助け、励まし合って生活しています。それだけでなく私にとって教えている学生も大きな支えになっています。最初は大学生という、今まで私の教えたことのある中高生に比べて比較的年齢の高い人たちに教えるとあって、受け入れてもらえるか、なついてもらえるか不安でした。しかし小さい大学ということもあってか、この学生はとても人懐っこく、キャンパスで顔を合わせれば"こんにちは、元気ですか"と笑って声をかけてくれます。

せっかく学生たちも懐いてくれ、授業にも慣れてきたところですが、ここでの時間がもう残りわずかであることに気付き、すでに名残惜しい気持ちでいっぱいです。残りの2か月も、こうして支えてくれる周りの人々への感謝を忘れず、後悔のないように学生と過ごす時間を楽しみ、FLTAとしての役目を果

たしていきたいと思います。

最終レポート

わたしの第2の母校となった Ursinus College での日々を終え、日本に帰国してからしばらくが過ぎ、あの1年が夢だったのではないかと思うこの頃です。フィラデルフィア郊外ののんびりとした環境の中、たくさんの友人と共に学び、日本語を教えることが出来たことをとても幸せに思います。

中間レポートでも述べたように、わたしは Modern Language Department の TA として、各レベルにつき週に1回日本語を教えました。後期ともなると1年生もだいぶ日本語に慣れてきて、だんだんと表現の幅が広がってくるのを感じ、学生以上にわたしが喜んでいただいているように思います。

1年生の最後の授業では、グループでスキットを作ってスキット発表会を行いました。限られた表現・語彙の中でも学生たちは工夫してユーモアに富んだスキットを作ってきて、みんなで楽しいときを過ごすことができました。他学年の学生たちも1年生のスキット発表を見に来ていて、お互いいい刺激になったようです。その後は前日に Supervisor の田中先生と用意していたカレーで学期末のパーティ。最後にはサプライズで、学生たちの寄せ書き入りの大学のロゴパーカーをもらい、嬉しくて胸がいっぱいになりました。

自分が日本語という言語を教えるとともに、春学期には特別教育の授業と、Public Speaking の授業を履修した。特別教育の授業では、アメリカで主流となっているインクルージョン教育(障がいを持つ児童・生徒が普通学級と一緒に授業を受けること)についても学び、実際にその現場を見学にも行きました。この授業を教える地元の高校の元校長先生の教授は、生まれつき片手の指が1本欠損していて、病気のために右耳が聞こえない方でした。そういう先生が特別教育の授業を持たれていることに強く感銘を受けました。困難があっても、それをどう受け取り努力するかは自分次第ということ、身をもって示してくださったようで、とてもわたしにとって実りのある授業でした。

Public Speaking の授業では、毎週のように即興のものや何度も原稿を練り直したもの、さまざまな形でスピーチをしました。この授業を通して言葉を伝える責任感を痛感することができたように思います。どんなに伝えたいことがあっても、伝える手段、手法がきちんとしていないと伝わりません。これからことばを教える仕事をしていく上で、自分のことばに責任を持っていかなければということを考えさせられました。



ことばの面で言えば、一緒に働いていたメキシコ人のスペイン語 TA のミリアムからもたくさんのことを学びました。彼女の英語は正直に言うとスペイン語なまりが強く、最初は聞き取りづかったことを思い出します。しかし彼女のことばはいつもよどみなく、伝えたいことを伝えられる強いものでした。もちろん発音やアクセントがいいに越したことはありませんが、大事なのは自分が何を伝えたいかということだ、ということを経験から教わりました。

自分の教えていた学生たち、指導してくださった Supervisor の先生方、一緒に支えあった TA 仲間… 大事な出会いがたくさんあった1年でした。懐いてくれた学生たちとお別れは特に辛いものでしたが、今の私の楽しみは、自分の教えていた学生たちが日本に留学してくることです。交換留学で日本にやってくる学生のほかにも、卒業して JET プログラムに合格し、ALT として日本の中学・高校に派遣されてくる学生もいます。もちろん彼らがどこに派遣されるかは分からないですが、いつか私も日本で英語の教員となり、自分が日本語を教えていた彼らと一緒に同僚として、日本の学校で働くのが私のささやかな夢です。

最後に、わたしを受け入れてくださった Ursinus College や、プログラム開始前から今までに至るまで手厚くサポートしてくださった日米教育委員会の皆さまに心から感謝したいと思います。この経験をこれから教員になって生かしていきたいと思っています。本当にありがとうございました。

フルブライト語学アシスタントプログラム (FLTA)

2010年度 参加者レポート

杉原 かおり --- Pomona College

中間レポート

2010年の8月下旬よりカリフォルニア州ロスアンゼルス郊外のポモナ大学 (Pomona College) にて日本語ランゲージレジデント (Japanese Language Resident) として勤務しながら、アメリカ研究関連の科目を履修しています。ポモナ大学は、質の高い教育水準を誇る全米屈指のリベラルアーツカレッジです。また、ポモナ大学はクレアモントカレッジ (Claremont Colleges) のひとつで、隣接している他大学との単位互換や施設の共有を盛んに行っています。

私は、日本語学科の教授陣のクラスのTAをしながら、オールデンボーグセンター (Oldenborg Center) という、外国語や国際関係を学ぶ学生のための寮、ダイニングホール、教室などを兼ね備えた施設に住み、そして働いています。主に、日本語会話クラス (上級・中級) の指導、初級クラスの演習授業の指導、文化活動の企画、ランゲージテーブルでのファシリテーター等を行っています。この仕事をしながら、各学期に、二クラスを学生として履修しています。

ランゲージレジデントは、文化活動 (料理、映画会、イベントへの引率等) が大きな役割のひとつで、さらに学生と共に寮に住むということから、他大学のTAよりも学生との距離がずっと近い存在です。一番印象的だった文化活動は、東北関東大震災のための募金活動です。ある学生の提案で、震災発生後すぐにバイクセール (bake sale) を行いました。日本では、募金活動というとお金を募るのが主流ですが、こちらでは何かを売ってその利益分を寄付するという形態がとても人気だそうです。学生と一緒にカップケーキ等を焼き、次の日にたった一時間で完売させ、多くの寄付を募ることができました。学生たちや協力してくださったすべての方々の日本を思う気持ちに感動し、胸にこみあげてくるものがありました。

私にとって、海外生活、仕事、日本語指導、外国の大学での学生生活は初めての経験であり、文化の違いや語学の面で苦慮することも多々ありました。そのような時に、私を支えてくれたのは世界各国から来ている同僚と上司たちでした。(写真左上: 筆者左端) どんな状況にあっても、前向きで寛容な姿に多くのことを学びました。また、どんなことにでも挑戦する同僚の姿に後押しされ、そして上司のすすめもあり、ワシン



トン DC でのフルブライト主催のカンファレンスでは、プロポーサルを書き、自分の会話クラスのビデオ制作に関するプレゼンテーションを行う機会を得ました。自分の経験を分かち合うことで、1学期間の自分の仕事を見つめ直す良い機会になりました。

多くのことに果敢に挑戦できる環境のもとで、様々なことを経験し、渡米前よりも大きく成長できていると実感しています。残りのアメリカでの生活も大事にして、将来は何らかの形で社会に還元していければと思っています。このような貴重な機会をくださったフルブライト、そしてポモナ大学の関係者の皆様に感謝いたします。ありがとうございました。

最終レポート

日本に帰国して、もうすぐ一カ月が経とうとしています。しかしながら、まだ日本での生活に完全に慣れずにいる自分があります。そして、できるものならば今すぐにもアメリカに戻りたいとさえ思います。周りからは、たった一年しか行っていないのに、大げさすぎると揶揄されていますが、逆カルチャーショックなのかもしれません。言い換えれば、それだけ、この一年間が充実していたということだと思います。

南カリフォルニアの燦々と輝く太陽の下で、ポモナ大学の日本語ランゲージレジデントとして働き、そして学んだ日々は、本当にかげがえのない日々となりました。慣れない海外での一人暮らし、不得意な英語、文化の違い、大学レベルでの日本語

指導・・・挙げればきりのないほどの不安を抱えての出発でしたが、理解ある優しい上司、世界から集まった親切で優秀な同僚と学生に恵まれ、何不自由することなく一年間を無事に楽しく過ごすことができました。さらに、フルブライトのオリエンテーションとカンファレンスで出会った世界から集まった FLTA の仲間からたくさんの刺激と感動をもらいました。

アシスタントとしてアメリカの大学で働きながら、学生と一緒にクラスを履修するという、まさに「二足のわらじをはいた生活」は、ただの留学よりもより深くアメリカを理解する機会を与えてくれたと思います。例えば、日本の有名なアニメを授業内で学生に見せたところ、その内容がアメリカでは性差別にあたるという学生がおり、大きなディスカッションへと発展したこともありました。深く考慮することなく教材として使用したことを反省するとともに、日本人とは違うアメリカ社会や文化を、生徒を通して学ぶ貴重な機会でした。また、プログラム上、そして私の派遣先の大学の特色上、世界中から集まった人々と過ごせたことは、アメリカ、ひいては、世界基準から日本社会をみつめることができ、新たな視座を得ることができました。大きな影響を与えてくれたこの一年の出会いと経験は、フルブライト語学アシスタントプログラムに参加したからこそだと思います。この経験を糧に、今後は国際理解教育も併せて行える英語科教員を目指したいと思います。

最後になりましたが、私にこのような機会を与えてくださり、また一年間、様々な面からサポートして下さったフルブライトの関係者の皆様に感謝いたします。本当にありがとうございました。これからも多くの日本人が私と同じような素晴らしい経験ができることを願っています。



※写真：学生と肉じゃがづくりをした時の写真。筆者右端。

フルブライト語学アシスタントプログラム (FLTA)

2010年度 参加者レポート

田中 志緒 --- Elms College

中間レポート

こんにちは。2010年度FLTAとしてマサチューセッツ州 Elms 大学に派遣されました、田中志緒です。こちらに来てもう半年以上経とうとしていますが、毎日充実したかけがえない日々を過ごしています。今回は中間レポートということで、こちらでの生活について紹介していきたいと思います。まず、私の仕事内容についてですが、私は現在、週に2日100分の授業を教えています。通常の授業の時間が合わない生徒のために同じ内容を違う曜日にも教えているため、正確に言うと週に4日、日本語のレッスンをしています。また上級レベルの生徒2人へのレッスンも週に1度2時間行っています。その他、前学期は日本食を学校のカフェテリアでふるまったり、インターナショナルクラブに参加したり、home coming day で日本文化紹介なども行いました。

今学期は、日本文化についての授業での先生の補佐も仕事の一つです。大学は田舎にあるとても小さな大学ですが、先生方もとても親切で、学校のみんが家族のようなどとても温かみのある大学です。この大学に来る前、プライマリーティーチャーとして日本語を教えるということで、自分で大丈夫なのか、教えることができるのか、とても不安でした。しかし日本語の授業の初日に、私の後に続いてひらがなを練習する生徒のみなさんを見て、言語を教える重みというか、この授業がきっかけで学生が日本に興味を持ってくれたり日本を知るきっかけになったりすることもあるのだと、とても感動して『がんばろう』と強く思ったことを覚えています。

今でも教材研究などをしていると、何から教えるか、どう教えるかで随分授業の流れが変わってくるのでなかなか難しいのですが、毎回学ぶことも多く、学生のみなさんに支えられながら楽しみながら授業をしています。2月の末には姉妹校である高知女子大から学生が2週間大学に訪れ、大学も日本一色になりました。女子大の学生のみなさんのおかげで、日本語を履修していない学生も日本語であいさつをし始めたり、日本についてたずねてきたりと、文化交流を通してたくさんの学生が日本に興味を持ってくれたこと、とてもうれしく思っています。



5月には日本語を履修している Elms の生徒が高知女子大に研修旅行に行く予定です。このように Elms 大学は小さな大学ではありますが、国際色豊かなとても良い大学です。同じ FLTA としてアイルランド語を教えているマチューがいることもとても心強く、秋学期は彼の授業にもよく顔を出して教え方の参考にしていました。

また、FLTA のプログラムでは1学期2つのクラスを履修することができます。私は秋学期には History と Education を履修し、今学期は Method ESL と Racial and Cultural Groups in the U.S という授業を履修しています。特に私の専門である Education や Method ESL の授業は日本の大学で学んだ内容とリンクしていたり、違う視点を発見できたりするのでとても勉強になり、将来教員になった時に生かしたいという内容ばかりでした。

History の授業では毎回のリーディングの量がとても多いので苦労はしましたが、その分アメリカについての知識を深め、アメリカから見るアメリカというものを知ることができたなと思っています。自分の英語力を高めるという面では、日本語の授業ではなるべく日本語を使うようにしているので、履修している授業を通してのリスニングやリーディング、ディスカッションなどが役に立っていると思います。

また、このプログラムでの素晴らしい経験の一つに大学へ派遣される前のオリエンテーションと12月に行われたワシントンでのカンファレンスがあります。そこでは世界中の FLTA

の仲間と知り合うことができました。そこで知り合った仲間とは今でも休み中に旅行に行ったり悩みを打ち明けあったりと仲良くしています。自分の人生の中でこんなにもさまざまな国の人々と自分の経験について共有できる機会はなかったので、本当に人生の宝物になりました。12月のカンファレンスでは日本人のFLTAのみなさんとともに久しぶりに再会することができました。タレントショーのために毎晩みんなでソーラン節の練習をしたり、ポスターショーで日本文化を紹介したりと仲を深め合ったこと、今でも楽しかったなあと思えます。とてもいい仲間ができました。

このように、あっという間の半年でしたが振り返ってみるといろいろなことがあったなあと実感します。たくさんの人に支えられて自分も成長できた半年になりました。このElmsCollegeに居ることができる期間も残りすくなくなりました。寂しい思いはありますが、残りの期間、自分ができることを精一杯して少しでも日本や日本語について学んでもらえたらと思います。短いですが、これで中間報告とさせていただきます。

最終レポート

私はマサチューセッツ州の小さな町 Chicopee にある小さな大学 Elms 大学で約8ヶ月間日本語のプライマリーティーチャーとして働かせていただきました。今振り返ってみるとあっという間でしたが、この8ヶ月はわたしの人生の宝物です。主な仕事内容については中間報告でも述べているので、今回の最終レポートではこのプログラムでの経験や感じたことを中心に書いていこうと思います。

大学に派遣される前、一年前の私はとにかく不安でした。日本語を教えた経験はおるか日本語教授の授業を取ったこともなかった私が、突然生徒を目の前に日本語指導などできるのか。私の英語力で大丈夫なのか。一体何から教えたらいいのだろう。プログラム参加を喜ばしく思いつつも、行く前までは漠然とした不安を抱えていた事を覚えています。しかしその不安は大学で生活を送るにつれてなくなりました。実際大学に行ってみれば、いつでも笑顔で相談ののって下さるスーパーバイザーの先生はじめ、会う度にわたしのことを気にかけて下さる先生方、同じFLTAとしてElms大学に来たマチュー、日本人留学生、そして私の話を熱心に聞いて学ぼうとする生徒がいました。わからない事は聞く事ができるし、つらいことがあれば相談もできる、そんなアットホームな大学の環境のおかげで、あまり気を張ることなく、楽しく生活を送ることができた気がします。後半になればなるほど友達も増え、学生と一緒に寮に住んでいた私は、部屋の前で名前を叫ばれたり、突然部屋に訪問されたりということもしばしばありました



(笑)。今ではそれもとてもいい思い出です。

もちろん、日本語を一人で指導することは難しく、毎回どう教えたらいいか悩みました。特にアクティビティーを考えるのが大変で、夜中2時から巨大なさいころや絵カードを作り始めるなんていうことも度々ありましたが、手作り教材を持って行った時の生徒のうれしそうな顔を見ると疲れもふっとびました。「しおのおかげでひらがなを勉強する気になったよ」「日本語が一番好きなクラスだよ」「来学期も教えてほしい」私のつたない授業の中、お世辞でもこんな言葉をくれる生徒たちに何度笑わせてもらい、助けてもらい、元気をもらったかわかりません。日本語の授業の後、私はいつも happy でした。言語を教えるってこんなに楽しいことなんだなあ、と改めて実感していました。それも生徒をはじめ出会った人みんなのおかげ。こちらでの人との出会いは私が得たもので何よりも大きかったものです。みんなが家族のようなElms大学で生活できたこと、とてもうれしく思います。

また、3月の日本での地震の際にはたくさんの人々に声をかけていただきました。同じFLTAのマチューはコンサートを開いて募金を呼びかけてくれ、学校でも生徒がリストバンドを作って募金活動。またスーパーバイザーの先生協力の元、日本へのお祈りの会として、チャペルで黙祷も行いました。仙台の大学を卒業したこともあって、日本の災害の中遠くにいる自分にやりきれない思いもありましたが、改めて人々の優しさや世界の強い繋がりを感じ、心から感謝した出来事でもありました。それだけではありません。近くの小学校で1400羽の折り鶴を日本のために作ったので私にプレゼントしたいという申し出があり、小学校へ訪問する機会もありました。日本の被害は知っていても実際に日本人に会った事がない子供たちが、私の話を聞く事で今回の出来事を身近に感じて、日本にも目を向けるようになるのよと学校の先生におっしゃっていた時、このプログラムの意義を強く感じました。私を通して大学の人々、そして地域の人々に日本について知ってもらい、興味をもっていただくことができたならとても光栄で

す。今学期はその他に、経済の授業で日本の経済について講義をするという機会も与えていただきました。このプログラムの主旨にあるように、私はこの経験を通じて日本の文化について考え、伝えるとともに、履修した授業や日々の暮らしを通じてアメリカの文化についても学びました。そして何より日本語を教えることで自分の英語教育への視野を広げることができたと実感しています。これからはこの経験を日本の子供たちに英語を教える上で生かし、少しでも多くの生徒が、外に対して広い視野をもつ国際人になってくれたらと思っています。

最後になりましたが、帰国前から常にサポートして下さったフルブライト日米教育委員会のみなさん、IIEのみなさん、このようすばらしい経験の機会を与えていただいたこと、心から感謝しています。本当にどうもありがとうございました。

フルブライト語学アシスタントプログラム (FLTA)

2010年度 参加者レポート

富田 正義 --- St Olaf College

中間レポート

昨年の春先、フルブライト FLTA プログラムに合格し、ミネソタ州に派遣されることが決まりました。「ミネソタ州ってどこだ?」と思い、さっそく地図で場所を確認してみる。アメリカ中西部、カナダの真下…。「いったいどれだけ寒いところなんだろう。果たして日本人がこんなところで本当に暮らしていけるのだろうか。」という、プログラムは楽しいのか、自分にとってプラスになるのだろうかという期待よりも、むしろ恐怖感を覚えたのが、正直、最初の本音です。

このような恐怖感から始まった私のアメリカ生活は、今現在は恐怖感とは程遠い、楽しくて有意義な、まるで時間が「光陰矢のごとし」ということわざのように過ぎていく次第です。では、実際に私のプログラムはどのようなものか以下に紹介したいと思います。

私の派遣されたセント・オラフ大学は、ミネソタ州ノースフィールド市というとても小さな町にあります。学生数は約 3,000 人。学生は非常に勉強熱心で、皆親切です。町の治安はものすごく良く、キャンパス内に限って言えば、日本よりも安全だと思います。例えば、学生は皆、自分の所有物をそこらじゅうに置きっぱなしにして、あちこちへ行きますが、誰も盗んだりしません。そして、気候については、やはりさすがに非常に寒いです。今年の冬は最低気温 - 33.8℃を記録しました。けれども、しっかり防寒すれば大丈夫だし、建物内はものすごく暖かいので、むしろ日本の冬(私は愛知出身)よりも過ごしやすいと思います。

そして、私のセント・オラフ大学での日本語 TA の仕事は、基本的に他の 3 人の日本人の先生方を補佐することです。私は、初級、中級のラボの授業を教え、1~4 年生まですべてチューターをし、会話テーブルを週 1 回行っています。ラボの授業は、毎回、試行錯誤の連続で、教案を考えては他の先生方にアドバイスをもらい、授業ではアメリカの学生は反応を顔に出しますので、それをもとに自分の授業がどのようなものだったか毎度振り返ります。また、チューターでは、私が学生に日本語及び、日本の文化を教えますが、それと同時に、私も英語やアメリカの文化について学びます。



また、私が先学期受講した授業は、心理学とフランス語です。なぜフランス語の授業を取ったのかと思われるかもしれませんが、これはアメリカで外国語の授業がどのように教えられているのかということに興味があったからです。既に、日本語の授業を見学することになっていましたが、さらに他の言語ではどうなのだろうかと思い、受講しました。そして、インテリムという短期集中講義には、ESL K-12 という授業を取り、毎日、移民や難民の高校へ行き、現場での授業観察・参加、及び講義を通して英語教授法を学びました。日本は基本的に移民や難民を受け入れていないので、私にとってはものすごく新鮮かつ刺激的で、大変貴重な体験でした。そして、今学期は教育心理学と芸術・人種・アイデンティティーという授業を受講しています。

これまで私がアメリカであらゆる授業を観察・参加してきたことは、アメリカでの第二言語教育と日本の英語教育、少なくとも私が受けてきた英語教育、は対極にあるということです。当てる焦点が全く違います。日本は未だに受験英語という関門をくぐるために、多くの学校では文法や読解、作文に重きが置かれています。しかし、私が観察してきたアメリカの授業では、文法は勉強しますが、文法を駆使するように実際に徹底的に練習し、リスニング、スピーキングの練習に焦点が置かれます。現に、ほとんどの日本人が高校を卒業するまでに最低 6 年間英語を勉強しますが、その大半が全く英語を聞きとれず、話せないのに対し、アメリカの学生はたったの半年~1 年足らずで日本語や他の言語をある程度話せるようになります。私はこの事実にはショックを受けま

した。

「日本の英語教育を変えたい。」私はこの思いを胸に FLTA プログラムに応募しましたが、正解でした。もう既に、私の中で、日本に帰国したら、将来私が担当する生徒たちに、どのように英語を教えるべきかというイメージの縮図ができつつあります。FLTA プログラムは将来日本で英語教員を目指し、かつ新しい効率的・効果的である外国語教授法を習得したいという者にとっては打って付けのプログラムだと私は確信しています。残りのアメリカ滞在約 3 カ月で、また新たにどんなことが学べるのかということ考えると興奮がおさまりません。残り、1 日 1 日を有意義に過ごしたいと思います。

最終レポート

極寒の地、ミネソタ州での私の FLTA プログラムもついに先日、幕を閉じました。たったの 9 カ月間でしたが、この短い期間で私が学んだことは計り知れません。今の自分は日本を出発する前の自分とは比較にならないほど大きく変わったと思います。英語力はもちろんのこと、人として、人間として 1 回も 2 回も大きく成長した気がします。では以下に、私の FLTA プログラムの内容をまとめてみようと思います。

まず、私は今回の留学で心に決めていたことがあります。それは、新しいことには積極的に挑戦することです。周りの人間から何か誘われたら、それがどんなことかよくわからなくても、とにかく参加しました。食事に出かけ、聞いたこともない名前の料理を食べたり、友達とイベントに行ったり、旅行したりしました。初めは周りの人間が話している英語がよく理解できず、苦戦した場面も少なくありません。しかし、わからないながらも皆と交流しているうちに次第に英語がわかるようになり、英語がわかるようになると彼ら・彼女らの文化も同時に学ぶことができました。そして、アメリカの大学生に日本語を教えることは、自分にとってすごく勉強になりました。まず、自分がどれだけ自国に関して無知であったかを思い知らされ、また、日本語の特性を知ることもできました。私は今までずっと英語とアメリカの文化ばかりを追いかけて来ました。しかし、いざアメリカで自国について教えると、今まで見えなかった日本の良さ、例えば人々の気配りや協調性、に気づくことができました。そして、日本語という言語が尊敬語などを持つことで日本人が世界の人々から言われる礼儀正しい民族であるということにも気づきました。また、日本語及び日本について教える際、必ず日米比較をしますので、学生たちと実際に話し合いながらアメリカ文化の良さや悪さも同時に学びました。学生たちと話し合った内容は非常に深く、今でも私の脳裏に焼き付いています。



また、FLTA プログラム概要にも記載がありますが、外国語教授法のスキルを高めるということが、今回の留学での一つの大きな目標でもありました。セント・オラフ大学の日本語プログラムは自分の想像を遥かに超えた素晴らしいもので、日本人の先生方からは一緒に仕事をしながら外国語教授法に関して、多くのことを学ばせていただきました。実際に、セント・オラフ大学の学生の大半が、たったの 1 年から数年の勉強期間で立派な日本語を話せるようになるという事実がプログラムの質の良さを裏付けていると思います。日本ではまだ導入が稀な「内容重視の言語教育 (Content Based Instruction)」を効率的に使っており、基本的に授業は文法や複雑な概念の説明以外はすべて日本語で行い、テクノロジーも駆使していました。また日本語教育の他に、私は秋学期にフランス語の授業を、冬の集中講義では ESL K-12 を聴講し、アメリカで行われている外国語教育に感銘を受けました。私は今回の留学で効果的な外国語教授法を学ぶことができたと思います。そして、フルブライト FLTA プログラムの良い点の一つとして、私は世界各国の FLTA たちと知り合うことができました。夏のオリエンテーションでは、他国の FLTA たちと知り合い、お互いの言語や国、文化について話し合いました。プログラム期間中、そしてプログラム終了後の今でもお互いに連絡を取り合っています。また、冬のワシントン DC での会議では各国の FLTA は自国に関していろいろ出展したり、ダンスなどのパフォーマンスをしました。ここでは様々な国の文化に触れることができ、大変貴重な経験をさせていただきました。

そして、私はこれから英語教師として、日本の英語教育界に革命を起こしていきたいと思います。多くの日本人は完璧主義者です。それ故、英語も完璧に文法ミスなく、アクセントなく、話さなければならないという錯覚に陥る生徒・学生も少なくありません。私もそういった学生の一人でした。しかし、大切なのは国際語としての英語を自信を持って話すこと。冬の集中講義の間、移民や難民の高校へ行きましたが、そこでは生徒たちは文法ミスやアクセントなど全く気にせず堂々と頑張って英語を話していました。またアメリカ人の学生も皆頑張って

日本語を話します。日本の英語教育に足りないものはこれだと思いました。また、日本という国は発展し過ぎ、さらに世界でも比類ないほど安全な国になりました。その結果、現代の日本人の多くが何か大切なものを見失っているように思えます。そこで、私は自分の生徒には、自分が今回の留学で得た様々な経験や学んだことを、英語を教えると同時に語っていきたいと思います。私は1人の英語教育者として、将来1人でも多くの立派な人間を、そして世界に羽ばたける人材を育てていきたいと思っています。

最後に、フルブライト FLTA プログラムを一言でまとめるとしたら、自らが国の代表となり、アメリカで自国の文化を人々と共有し、それと同時に自らも様々な国や民族の価値観を学び、真の国際人を目指すプログラムだと思います。そして、私はこの素晴らしいプログラムに参加できたことを大変有難く思い、無事にプログラムを終えることができたことを日米教育員会及び IIE の皆様に、そしてセント・オラフ大学アジア学科の先生方、私がこのプログラムで出会ったすべての方々に心より感謝の意を述べたいと思います。本当にありがとうございました。